

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

Table with 2 columns: Field Name, Value. Fields include: 事業所番号 (4070001351), 法人名 (株式会社 ウキシロケアセンター), 事業所名 (グループホーム いこいの里小波瀬), 所在地 (福岡県京都郡苅田町大字新津1505-27), 自己評価作成日 (令和4年2月1日)

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

苅田町の町並みを見渡せる高台に位置しており閑静な住宅地の中で多様な福祉事業を展開している。隣接する特定施設との連携や交流も日常的にあり、また地域との行事・災害時の連携や協力体制もできている。季節を体感して頂く為、外出の機会を多くもち、個別機能訓練にも積極的に取り組んでいる。また法人全体で合同行事や職員育成にも積極的に取り組んでいる。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

Table with 2 columns: Field Name, Value. Fields include: 基本情報リンク先 (http://www.kai gokensaku.jp/40/index.php)

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

街全体を見渡すことが出来る高台に建っており、周囲には住宅が建ち並んでいる場所に「グループホーム いこいの里 小波瀬」は建っている。同性介護を基本としており、入浴介助や排泄介助等、直接肌に触れる介護に関しては極力、同性で介護をするようにしている。近隣に関連事業所があるため、コロナウイルス感染症の流行がなければ、行事を合同で開催したり、災害についての訓練を共に行う等、密に連携を図っている。法人としては職員に対して金銭的な貸付制度(無利子)を設けたり、母子寮があるため、育児世代の職員でも夜勤勤務が出来るようにする等、福利厚生面でも非常に秀でた面を持ち合わせている事業所である。

【評価機関概要(評価機関記入)】

Table with 4 columns: Field Name, Value. Fields include: 評価機関名 (株式会社 アーバン・マトリックス 福祉評価センター), 所在地 (福岡県北九州市戸畑区境川一丁目7番6号), 訪問調査日 (令和4年2月23日), 評価結果確定日 (令和4年3月31日)

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

Large table with 4 columns: Item No., Item Description, Achievement Results (Self-check), Achievement Results (Evaluation). Rows 58-64 describe various service outcomes like user satisfaction, staff interaction, and safety.

自己評価および外部評価結果					
自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員が理念の実施に向けて取り組めるように理念を共有空間に掲示して理念を理解すると共に実践の中で取り組んでいる。	朝礼時に毎日、職員で理念の唱和をしている。入社時には、新人職員を集めて代表取締役が研修の中で理念についての話もしている。年2回、提供しているサービスの内容が理念に沿って提供出来ているかの確認をしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会に加入して地域の行事(敬老会・盆踊り・神幸祭など)や活動(近隣清掃・災害訓練など)に参加をして交流を深めている。	コロナ禍以前は、敬老会、盆踊り、神幸祭等に参加をしたり、公民館で月1回「いきいきサロン」が開催されており、出席していたが、現在は参加を控えている。町内会に加入しているため、回覧板が回ってきており、地域の情報を収集している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所内にて様々な勉強会を開催して家族や地域の方々に参加案内を出している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は家族代表・地域代表・行政担当者等の出席により2か月に1回定期開催をしている。状況報告・行事案内・身体拘束について家族や地域との意見交換の場となっている。	コロナ禍であるため、書面開催をしている。書面開催した際の会議録は市町村職員には持って行き、町内会長には郵送している。職員や利用者家族には、いつでも閲覧できる様に共用スペースに置いている。	運営推進会議録は、利用者家族にも郵送等して、事業所の取り組み状況を伝える機会を持ってはどうだろうか。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	社会福祉協議会との交流や地域包括支援センターに訪れる際は情報交換や相談を行っている。また運営推進会議時に行政職員と意見交換を行い情報の共有を図っている。	ケアマネジャー研修会の案内が市町村から来ている。生活保護受給者の利用者が入居されているため、ケースワーカーには入退院の連絡や、特段、何か家族から相談があった際は連携を図っている。コロナウイルス感染症の関係で、感染症予防方法や物品の在庫確認等のやりとりもある。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	会社独自に虐待防止委員会を設置。勉強会を開き、虐待防止及び身体拘束防止に努めている。また施設でのミーティングや運営推進会議で身体拘束についての意見交換や事例検討を実施している。	身体拘束を実施している利用者はいない。センサーを利用されている方もいない。「身体的拘束その他の行動制限廃止マニュアル」を作成して実践している。研修は内部研修を主体として2か月に1回、研修や事例検討を実施して、その研修の内容を運営推進会議に諮り、意見をもらっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	会社独自に虐待防止委員会を設置。勉強会を開き、虐待防止及び身体拘束防止に努めている。また施設でのミーティングや運営推進会議で身体拘束についての意見交換や事例検討を実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見人制度や日常生活自立支援事業について現在、活用されている対象者がいる。 資料を使い情報提供を行っている。 また各関係機関の連絡先リストを用意して活用できる体制ができている。	成年後見制度を利用されている利用者があり、弁護士の方が関わっている。月1回は弁護士から連絡があり、必要物品がないかや体調の確認の連絡がある。権利擁護の研修は制度の説明を研修会の中で短時間実施している。	成年後見制度や日常生活自立支援事業のパンフレットを準備して、利用者家族や地域の方から質問があった際に、説明できるように準備してはどうだろうか。
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書と重要事項説明書を用いて項目毎に説明して本人と家族が納得・了承した上で契約・解約を行い改定を行う際は事前にお知らせして説明を行っている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議・オンブズマン委員会(第三者による外部相談委員会)には家族の参加があり意見や要望を聞く場となっている。また出てきた意見は施設運営に反映するように努めている。	コロナ禍ではあるが、面会がガラス越し面会のみではなく、直接会えるような面会にして欲しい等の家族からの要望があっている。そのため、コロナウイルス感染症が落ち着いた時期には、直接会える面会を実施して、家族の要望を少しでも反映させるように努めている。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月、各事業者内のミーティングと勉強会を行い意見交換の場を設けている。	毎月のミーティング時や、随時、業務中に職員から意見がでた場合は、管理者が一旦話を聞いて対応している。物品購入があった方が円滑に業務が出来るとの意見が出て、検討した結果、物品購入をする等、職員の意見を反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	毎月、管理者ミーティングにて各事業所スタッフの現状を報告して見直しを行っている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また事業所で働く職員についても、その能力を發揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	職員採用に当たっては年齢や性別による排除は行っていない。向上心のある方や社会人としての資質等を重視している。法人として人事考課制度を取り入れて職員の働く環境整備の支援を行っている。	30歳代から60歳代の職員が勤務をしている。職員の中で、レクリエーションが得意な職員がいるため、利用者と一緒にレクリエーションを楽しみながら実施している。年1回の職員面談や、職員の今後のビジョンについての面談を実施したりして、本人が家庭環境と両立して仕事が出来ているかや、異動の希望があれば話を聴くようにしている。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	入居者の自由・人権・プライバシーを守るべくオンブズマン委員会が設置されている。 また法人としての身体拘束禁止・虐待防止委員会を設置しており研修・ミーティング・運営推進会議において勉強会を開催して自己啓発をに取り組んでいる。	オンブズマン委員会が設置されており、町内会長、地域住民、町役場職員、利用者家族等で構成されている。身体拘束廃止に関する研修や高齢者防止に関する研修と一体的に、人権教育も実施している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内には虐待防止・口腔ケア・レクリエーション等の各委員会を設置しており実践的な取り組みが行われている。法人として各職員で自己評価を行い、自己能力の開発意欲を刺激して結果についても本人にフィードバックして効果的な育成に向けて取り組んでいる。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	京築地域のグループホーム連絡協議会に参加して意見交換や情報共有・イベント参加等の交流を行っている。社会福祉協議会の勉強会にも参加をしてネットワークの構築やサービス向上に繋がるように取り組んでいる。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人が安心する居場所ができるように会話の機会を増やし他利用者とも馴染めるように笑顔ができるように支援している。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	見学に来られた時、契約時、入居時に、ご家族に話を伺い「私の基本情報」を作成している。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居者の状態に変化がある時は直ぐに状況を連絡してケアプランの見直しを行っている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	同じ時間を過ごす中で昔の言葉やその意味、地域の方言等を入居者の方々から教えて頂く事も多く、またその場面作りの場もつくっている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族の面会時には必ず状態や様子のお話しをしている。その際にご家族にもケアに対する要望を伺っている。		
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地域へ散歩や買い物、また地域行事へ参加する事で顔馴染の方との交流ができています。また本人の趣味や思考をレクリエーションへ取り入れており趣味が継続できるように支援している。	コロナ禍であるが、窓越し面会を実施している。利用者の中には知人に手紙を書いたり、年賀状を書いて、今までの関係が継続出来る様になっている。利用者家族から電話があり、利用者に取り次いだり、知人からの電話を取り次ぐこともしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者の方々の状態把握を行い個々のコミュニケーション能力に配慮しながらリビングの席位置を決めている。状態変化等あればその都度話し合い、変更を行っている。	コロナ禍以前は、買い物に行ったり、地域の方々が来られた時は面会対応したり、ドライブに行ったりしていたが、現在は実施出来ていない。現在は町内の公園に散歩したり、町内の中を散歩する等している。	
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後も家族からの相談等あれば応じられる体制をとっている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	センター方式を活用して木目細かいアセスメントを実施している。生活歴等の把握で本人の全体像を知る為の取り組みが行われている。また職員の気づきについても記録して利用者へより良い生活ができる支援に繋げている。	センター方式を一部使用して、利用者の思いや意向を記録するようにしている。利用者本人や利用者家族に直接お聞きして意向を確認している。意思疎通が難しい利用者には、表情を見たり「はい」か「いいえ」で簡単に答えられる質問をして、利用者の思いや意向を汲むようにしている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人のファイルを使い職員間で過去の出来事等を共有している。 その上で毎日のケアに活かして支援を行っている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居者1人ひとりの介護記録を記載、1日の過ごし方や特記事項を記録している。 また毎朝朝礼を行い全職員が個々の状態把握ができるように取り組んでいる。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人・家族の意向を大切に職員や医療関係者の意見を反映させた介護計画を作成している。実施表により毎日の状況を確認・モニタリングを毎月実施して状態変化に合わせた介護計画を作成している。	ケアプランは3か月に1回見直しをしている。居室担当職員と計画作成担当者が意見を出し合って作成している。アセスメントに関しては居室担当が実施して、他の職員と共有をしている。ケアプランの内容やケアの方針については、月1回のミーティングや朝礼等で意見を出し合っている。	ケアプラン第1表に、緊急連絡先の記載をして、緊急時に直ぐに連絡先に連絡出来るようにしてはどうだろうか。
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子の中で変化が見られた時は記録に記入して情報共有している。また変化が見られた時はその都度カンファレンスを行いケアについて話し合う時間を設けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	隣接する同法人の特定施設との連携が充実しており行事やレクリエーション等、日常的な交流を積極的に行っている。また状況に応じて受診支援も柔軟に行っている。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源と協働しながら支援を行っている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人・家族の意向によるかかりつけ医との関係を大切に適切な医療が継続受けられるように支援をしている。歯科往診についても随時、対応している。	入居時に嘱託医に変更する事もご案内しているが、今まで受診していた主治医にかかりたい方は継続してもらっている。他科受診については、家族が対応可能であれば対応し、難しい場合は家族が対応している。夜間はオンコール対応職員に電話している。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療連携体制で週1回訪問看護が入っている。看護と介護が情報を共有したり相談をして体調変換の早期発見に繋げている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は定期的にお見舞い訪問を行い病状や経緯を看護師やソーシャルワーカーに聞き家族と今後の対応を相談したり早期退院ができるように支援を行っている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や終末期に向けた方針を示し家族に同意を得ている。併設する特定施設でもターミナルケアに対応体制があり状況に応じて家族や主治医と話し合いを重ねて支援の方針を共有している。	看取りに関しての指針を作成している。看取り期になった時点で、嘱託医と家族を交えて話し合いを行い、看取り期になった段階で医療機関への入院や関連事業所の介護付有料老人ホーム等のご案内をしている。	
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年2回、消防署の消防隊の指導の下、消防訓練を実施している。災害時の総合訓練と救急隊による応急救護や心肺蘇生法のレクチャーを実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に避難訓練を地域住民の参加協力により実施している。訓練の機会を活用して応急救護や心肺蘇生法についてのレクチャーを実施している。	年2回実施しており、夜間想定訓練も実施している。火災訓練を実施しており、風水害や地震についての避難経路の確認をしている。備蓄に関しては水やカンパンを常備している。コロナ禍以前は、消防署の立ち合いで講習してもらったり、心肺蘇生の講習も実施してもらっていた。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
38	(17)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	オンブズマン委員会を設置して日々の暮らしの中でも入居者の方々への対応の仕方や言葉遣い等を職員間で確認し合っている。記録等の個別情報の取扱いにも十分に注意を行いキャビネットにて保管をしている。	利用者の人権の尊重の面では、認知症の研修会や接遇研修を実施して、言葉遣いにも十分に配慮できるような研修会を実施している。個人情報等が記載されている記録物は、鍵のかかるキャビネットに保管をしている。同性介護を基本としているため、肌が触合う介護に関しては、極力同性介護としている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	常に声掛けを行い本人の思いを確認している。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者一人ひとりの希望や状況に合わせて起床や就寝、食事時間などを柔軟に考え対応している。元々のライフスタイルや個々のペースを尊重して無理強いする事のないように努めている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	希望に合った髪形や服装などを行い個性を尊重した支援を心掛けている。また外出時は希望にできるだけ合わせているが職員がチェックを行い身だしなみに配慮をして支援している。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は隣接する特定施設の食堂で調理となり気合う方とテーブルを囲み食事を楽しんでいる。また外でおやつや飲物を取りながら楽しんで頂く日も設けている。	近隣の関連事業所の厨房で調理された食事を提供している。事業所内で調理された食事を取り分けて提供している。ご飯は事業所で炊いて提供している。下膳や茶碗拭きやお盆拭き、テーブル拭きをされる利用者もいる。	
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	入居者の状態や状況に応じて食事量や食事形態を変えている。水分補給を定期的に行い脱水症状にならないように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後の歯磨きと義歯の手入れを行っている。また口腔ケアの勉強会を定期的に行い口腔内の清潔保持に努めている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンを把握して時間毎にトイレ誘導を行っている。また状態に合わせて直ぐに対応できるように職員間で情報共有をしている。	排泄チェック表を作成し、排尿間隔を見極めて介助する事で、オムツに失禁する回数が減り、トイレで排尿をする事が多くなった事例がある。また、排便の間隔もつかむことによって、トイレで排便する回数が増える等の事例がある。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	散歩や運動にて腸の動きを働きかけたり排便を促進するような飲食物を提供している。また状態に合わせて直ぐに対応できるように職員間で情報共有している。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的な入浴日は決めているが個々の希望や状況に合わせて柔軟に対応している。また季節に合わせて菖蒲湯や柚子湯など入浴を楽しんで頂く工夫をしている。	週2回入浴支援している。柚子湯や菖蒲湯など、季節に応じた入浴の機会を提供している。入浴の曜日や時間帯について嫌がられた場合は、可能な限り対応する職員を変えたり、時間帯を変えて入浴の声掛けをして入浴してもらっている。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入居者の状態に合わせて起床時間を変えたり柔軟に対応している。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々にカルテを作成して薬の説明書を添付している。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人に合わせて洗濯物の整理や食器の整理、掃除など家事を手伝って頂いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天候や入居者の希望に応じて日常的に外出の機会をもっている。隣接する特定施設にも気軽にかけられる環境がある。	コロナ禍以前は、月1回、近隣の関連事業所と合同で行事を実施していたが、現在は控えている。また、家族と外出して外食したり、家族と一緒に自宅に一時帰宅するような事もしていたが、現在はコロナ禍でご遠慮していただいている。現在は町内を歩いたり、公園を散歩したりしている。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	必要に応じて支持できるようにしている。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	いつでも利用できるように配慮している。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	24時間の空調管理にて室内温度を一定の温度で調節している。季節ごとに利用者に花を生けて頂いたり季節の飾り付けをしている。	テーブル、椅子、本、テレビ、オーディオ、カラオケセット、観葉植物があり、職員と一緒に観葉植物の世話をしている。事業所が高台にあるため、リビングの大きな窓から景色が一望できる。季節に合った飾り付けをしたりしている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テレビを皆が見れる位置に置き自由に好きなチャンネルに変えられるようにしている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	以前より使用していた身の回りの物を持って来て頂き使用している。	介護用ベッド、電灯、エアコン、カーテンが設置されている。利用者の使い慣れた筆筒や仏壇、冷蔵庫を持ち込まれたり、家族写真やアルバムを置いて、時々見ている利用者もいる。また、日によって床に寝たいという利用者もいるため、畳を敷いてその上に布団を敷いて寝る利用者もいるので、その都度希望に応じて対応をしている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室にはネームプレートを飾り、トイレやふろ場なども解りやすく工夫をしている。		